

英国ダーラム大学 ジョーダン・メソッドによる日本語教育 —その結果と問題点—

クロス尚美

1 ダーラム大学における日本語教育

ダーラム大学における学位取得のための専攻科目として、日本語が取り入れられてからようやく三年をむかえる。現在第1期生が第3学年を終了したところであり、卒業生はまだ出していない。日本語および日本文学など日本学関係の科目だけで学位をとることはできず、必ず経営学、政治学、他のヨーロッパ言語などの組合せが要求される。

昨年10月、第3期生より、初めての試みとしてジョーダン・メソッドによる日本語の集中コースが始まった。アメリカ以外でジョーダン・メソッドを取り入れている大学は多くない。英国の大学で、現在ジョーダン・メソッドによる日本語教育を行なっているのはダーラム大学のみである。

概要 1年生（第3期生）

教師 : 米国人専任講師 1名
日本人インストラクター 2名 (フルタイム)
1名 (パートタイム)

学生 : 日本語 + 経営学 8名
日本語 + ロシア語 1名
日本語 + ドイツ語 2名
ディプロマ (大学卒) 2名
計 13名

教材 : Japanese: The Spoken Language Part 1~3
by Eleanor Harz Jordan with Mari Noda
Yale University Press

書き方・読み方副教材
by William McClure (ダーラム大学専任講師)

JSL ビデオ

JSL カセット・テープ

授業 :	文法説明 (英語による)	週	3時間
	会話ドリル (13名を2グループに分けての少人数制)	週	10時間
	ランゲージ・ラボ (個人学習)	週	5時間
		計	18時間

2 ジョーダン・メソッドの特色

ジョーダン・メソッドでは、独自の文法解釈・指導法に基づき、敬語なども含めTPOに即した「日本語らしい日本語（話し言葉）」の習得を目指す。文字に頼らず、耳で聞いた会話スタイルの文型を繰り返し練習することにより、反射的に適切な言葉が口をついて出てくるよう訓練する。

ジョーダン・メソッドの教科書 Japanese: The Spoken Language (以下JSLと略す)には日本語文字は使われていない。学生はまず訓令式に似たローマ字表記に慣れなければならない。学生が日本語を「読んで」覚えようとしないう、わざと英語話者が読んで発音しづらいようになっている。

文法項目と語彙の導入においては、その数と導入順序に細心の配慮がなされている。最低限の語彙と文型を効率的に活用し、より多くの表現を可能にしようとしている。

ジョーダン式の文法のとらえ方については、次回詳しく発表したい。

3 ジョーダン・メソッド — その成果と問題点

話し言葉の短期習得

JSLでは、1時間目から「使える日本語」を会話形式で導入する。例えば、日本語を始めて1週間もたたないうちに、

「飲みませんか」 — 「いや、ちょっと・・・」

「買いましたか」 — 「ええ、高かったですよ」

などの言い回しができるようになる。学生たちは習いたての日本語を使う機会を求めて、積極的に日本人学生に話し掛けるようになる。今日習った文型が、すぐ使える、通じるという喜びが、いっそうの励みとなるようだ。

3ヵ月もすると、「あっ、どうもすみません」「じゃあ、また明日」などとすらすら言えるようになる。「あっ、もうこんな時間ですよ」「ちょっと早いですけど、今日はこのへんで・・・」などと、授業が休み時間に食い込むのを牽制したりするようになる。ごく短期間に流暢に話せるようになるという点で、ジョーダン・メソッドは大変効果的だ。

JSLでは語彙数と文型数を制限しているの、他の教材を使った場合にはもっと早く学習するような表現、例えば、

「わたしは～が好きです／欲しいです」

「冬休みに～をするつもりです／したいです」

などがダーラム大学のプログラムでは、第2学期(2月ごろ)になってやっと導入されることになる。また語彙数と文型数、導入順序を厳しく制限しているの、少々時代遅れ、あるいはあまり実用性のない文型が登場することもある。例えば、日本語の学習を始めて2ヵ月足らずで、

「まあ、おたくのお坊ちゃんですか。大きくおなりになりましたねえ」

とは言えるが、クリスマス休暇を前にして、クリスマスプレゼントに何を買いたいか、どこに行くつもりかなど、学生にとってより身近な話題を取り上げることができないという事態が生じてしまう。

読み書きの指導

ジョーダン・メソッドの最大の弱点は、読み書きが疎かになることだと言われる。そのため、ダーラム大学では専任講師がJSLの会話文例に基づく読み書き副教材を開発し、活用している。第2週より仮名の導入を始め、1年間で漢字を350字習得、第3学期までには300字程度の作文もこなせるようになった。テーマを与えると会話文を盛り込ん

だ独創的な作文も書くようになった。しかしJSLの会話体重視が、作文を書くにあたって、文体の混乱を起こしやすいという問題もでてきた。作文の中で「ちょっと困りましたよ」や、「だめですねえ、わたし」などを連発する。JSL以外の書き言葉にも慣れさせる必要を痛感したが、これは綿密な計画の基に語彙と文型を積み重ねていくというジョーダン・メソッドに反するものかもしれない。

漢字の導入順序もJSLの語彙出現順となるので、総合的な漢字指導が難しい。また、選ばれた350字の中には実際に使用頻度の低い非実用的な漢字が含まれ、使用頻度の高い漢字が導入されないままになってしまう可能性も多分にある。読み書き副教材の推敲に際して、JSLの語彙目録と「基本漢字500」などのリストを照らし合わせ、効率の良い選択を心がけねばならないだろう。

4 まとめ

ダーラム大学では、少人数制のインテンシブな日本語教育を行なっている。衛星放送を含めたLL設備、蔵書、補助教材なども年々充実してきている。また、常勤/非常勤を含め、日本語/日本学関係のスタッフは2年前と比べて一挙に4倍の8人となった。

英国では定着しにくいだろうと言われていたジョーダン・メソッドも、このような恵まれた環境で、徐々にその真価を発揮することが期待できる。話し言葉偏重、JSL枠内での読み書き指導の難しさなど、これから解決されなければならない問題点もあり、ジョーダン・メソッドの特色を活かしながら、英国の大学における日本語教育の実情にどう適応させていくかが今後の課題といえるだろう。